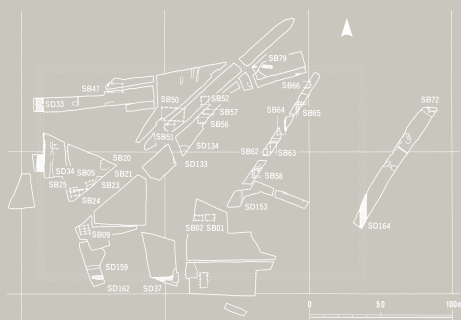




春日井市遺跡解説パンフレット その2

勝川遺跡・勝川廃寺

— 環濠集落から古墳群、そして伽藍へ —



弥生～古墳時代の勝川遺跡

～ 環濠・木製品加工場・墓域の展開 ～

勝川遺跡の立地と歴史的展開 からがわ 勝川遺跡は、段丘島居松面(標高約13～14m)から、その直下の地蔵川・庄内川が形成した沖積低地(標高約10～11m)にかけて立地し、推定範囲はおおよそ東西600m・南北400mに及びます。

勝川遺跡は、弥生時代中期の環濠集落として成立し、以後、近世の町家に至るまで、連綿と人々の営みをたどることができ、現在の「勝川」の起源となる遺跡に位置付けられます。なお、住居等の痕跡は確認されていませんが、縄文土器・石器が出土しており、歴史的起源はさらにさかのぼるものと推定されます。

勝川遺跡は、区画整理等に伴う大規模な発掘調査が行われ、時代と集落形態・遺跡の種別などにより分類すると、環濠集落・古墳群(勝川古墳群)・古代寺院(勝川廃寺)・宿場町など複合遺跡として様々な要素が錯綜することが明らかとなっています。

地理的にみた勝川遺跡は、庄内川と近世下街道の交差点に位置し、近世下街道の歴史的起源がさかのぼる可能性からも、古くからヒト・モノの流れが交わる要衝に位置したと推定されます。

弥生～古墳時代の勝川遺跡 勝川遺跡は、勝川町4・5・9・10丁目を中心として展開し、区画整理前の字名により上屋敷地区(4・5丁目)・南東山地区(9丁目)・苗田地区(10丁目)とよび分けています。弥生時代～古墳時代の集落は、段丘上の上屋敷地区に墓域・南東山地区に居住域、氾濫原の苗田地区に生産域が想定されています。

環濠の全容は明らかではないものの、墓域と居住域は環濠を隔てておおよそ東西に位置し、弥生時代中期の環濠は部分的に二重となっています。後期の環濠は中期の環濠を埋め立てた後に掘削され、古墳時代には環濠としての機能を失い、埋め立てられて西側へと居住域が拡大します。

居住域の発掘調査は、南東山古墳が土取りにより滅失した際、墳丘直下で計7棟の竪穴住居を検出したことが端緒となり(南東山地区)、その後の大規模な発掘調査による集落構造の解明・古代寺院(勝川廃寺)の遺構検出へと結実します。



勝川遺跡現況航空写真(1997年2月撮影・南から)



上屋敷地区 弥生時代中期環濠



南東山地区出土 弥生土器(中期)



南東山地区出土 弥生土器(後期)

勝川遺跡の生産工房(木製品・石器)



旧地蔵川と掘立柱建物群



木製品(広鋏・股鋏・斧柄・ミカン割 板材)



木製品出土状況



石器(剥片・石核・磨製石斧、打製石鋏)

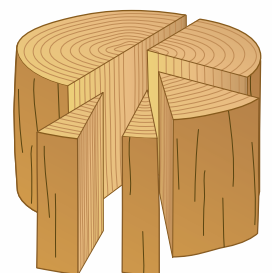


石帯・玉類(管玉、ガラス小玉・丸玉・切子玉)

旧地蔵川に面して、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての木製品加工の作業場と推定される掘立柱建物群が確認されています。周辺では、石器・玉類の原石も出土しており、生産の場であったと推定されます。

勝川遺跡では、農具(鋏・鋤・泥よけ・竪杵・横槌)、工具(斧の柄)、狩猟具(弓)、漁労具(タモ網の杵木)、容器・食器(槽・杓子)などのほか、原材料となる木材や加工途中の未製品も多く出土しています。出土した鋏などは、現代のものと比較しても機能や基本的な形態に大差はなく、既に完成された「カタチ」といえ、高度な加工技術がうかがえます。

一般的に広葉樹は硬く、針葉樹は軟らかいとされ、木製品の加工は、木の硬さ・弾力性・比重など、特性に応じて使い分けがされています。農具や工具の柄などは硬く、重いアカガシ亜属、容器などは加工しやすいケヤキ属・ツバキ属などを選択します。なお、弥生時代の頃は、鋸がなく、板材を切り出すことができないため、丸太を縦方向に $1/2 \Rightarrow 1/4 \Rightarrow 1/8 \Rightarrow 1/16 \dots$ と順次均等に割っていき、いったん板状に薄く加工した後に製品へと仕上げます。このような手順で割り取った板材の断面形は二等辺三角形となり、あたかもミカンの房のようにみえることから「ミカン割」とよんでいます。



ミカン割 模式図

方形周溝墓から勝川古墳群へ

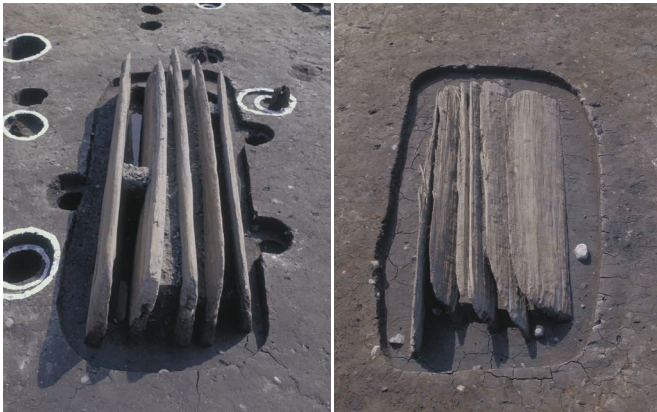
～ 勝川古墳群の系譜と南東山古墳の歴史的位置付け ～

弥生時代の伝統的墓制とマツリ 勝川遺跡では環濠を隔てた居住域の西側を中心に墓域が展開し、弥生時代中期から古墳時代中期にかけての方形周溝墓(円墳1基含む) 53基が確認されています。

方形周溝墓とは、方形に溝を掘って区画し、掘削土を盛り上げた低い墳丘に土坑を設けて埋葬する弥生時代前期から古墳時代にかけての墓制の一つです。区画溝からは埋葬あるいは埋葬後の祭祀(マツリ)に伴う土器などが出土する事例が数多く認められます。

弥生時代中期の方形周溝墓(SZ19)からは、一対となる長頸壺・器台3組を含む土器が出土しています。壺は焼成前に底部に小円孔をあけ、非実用的な供献専用器具として製作されており、日常とあの世(墓)を区別する意識・死生観が生まれていたことを示しています。

棺材としてのコウヤマキ 墓に関連する遺構として、コウヤマキの板材を埋納した弥生時代中期の大型土坑(SK43・47) 2基が検出されています。板材は、長さ180cm・幅50cm・厚さ6cm前後と一定の規格性を有し、「組み合わせ式箱形木棺」の棺材として5枚1組(=底板1枚・側板2枚・蓋1枚、残る1枚は分割して小口板)で使用したと推定されます。コウヤマキを棺材とする葬送思想は、弥生時代から古墳時代へと継続します。



コウヤマキ板材出土状況(左: SK43・右: SK47)

勝川古墳群の系譜と被葬者像 勝川古墳群は墳形や規模は不明な点が多いものの、5世紀後葉から7世紀代にかけて形成され、笹原古墳[銀製釧]・山神古墳[三環鈴]からは渡来系の遺物が出土するなど、被葬者の出自や性格を考える上で注目されます。

南東山古墳は、1969年に土取り工事に伴う発掘調査が行われ、直径約40m・二段築成の円墳と推定され、主体部は遺存していなかったものの、墳丘上から埴輪や須恵器が出土しています。埴輪は段築平坦面への配列、須恵器は副葬品あるいは墳丘上での祭祀に用いられたと推定され、蓋坏(坏蓋7点・坏身9点)・無蓋高坏3点・高坏形器台3点・広口壺2点・甕1点・脚付短頸壺1点・鳥鈕蓋3点など豊富な内容を誇ります。鳥鈕蓋付須恵器は6～7世紀代の東海地方に分布し、6世紀中葉の南東山古墳は、比較的古い事例に属します。

勝川古墳群の西約1.5kmに前方後円墳を継続的に築造した味美古墳群が所在し、両古墳群の関係は後の勝川廃寺の造営に至る歴史的経緯としても注目されます。



方形周溝墓 SZ02



弥生時代中期供献土器 SZ19出土底部穿孔壺(長頸壺)・器台



古墳時代中期供献土器 須恵器 壺・蓋坏・有蓋高坏

南東山古墳は首長墓か？ 埴輪・鳥鈕蓋付須恵器



南東山古墳出土 蓋坏・鳥鈕蓋



南東山古墳 墳頂発掘調査



勝川古墳群・勝川村地籍図(明治20年)

南東山古墳 墳丘測量図



二子山古墳出土 円筒埴輪・形象埴輪



南東山古墳出土 円筒埴輪・朝顔形埴輪

南東山古墳から出土した埴輪は、円筒埴輪のほか、少量ながら朝顔形埴輪・形象埴輪(人物?など)が確認されています。円筒埴輪・朝顔形埴輪は、灰色で硬質な焼き質、ロクロの回転力を利用した「回転横ハケ」調整、タタキ調整、分割成形など、須恵器の製作技法との類似性が認められます。このような特徴の埴輪は、味美古墳群の最盛期に相当する二子山古墳(6世紀前葉)からも大量に出土しており、供給窯として下原古窯跡群が想定されています。下原古窯跡群は、主に須恵器の生産を行った窯ですが、古墳築造に伴い大量に必要なとされた埴輪を臨時的に生産したと推定されます。

二子山古墳は墳長94mの前方後円墳で、周溝の外側に溝で区画された埴輪の配列空間が存在し、人物(正装男子・巫女・武人・力士・盾持ち人)・動物(馬・水鳥)・器財(蓋・盾)・家など、総数は100点を超える可能性があります。円筒埴輪は、3突帯4段で、口径約50cm・底径約30cm・高さ約70cmと、一般的な2突帯3段・高さ30～45cmに比べると大型で、古墳の形や規模に応じた規格構成を示唆しています。南東山古墳の円筒埴輪は、全体規模は不明であるものの、3突帯4段の大型品であり、細部の特徴も二子山古墳に類似しています。埴輪の特徴から南東山古墳の被葬者は、二子山古墳(味美古墳群)と密接な関係を有した有力豪族であったと推定されます。

幻の大伽藍 勝川廃寺

～ 古墳群から伽藍へ、律令祭祀の展開と郡衙 ～

古代寺院の展開 仏教の公伝は538年、本格的な寺院の建立は596年蘇我馬子による飛鳥寺が最初とされ、その後『日本書紀』推古天皇三十二(624)年条に「寺四十六カ所」、『扶桑略記』には「持統六(692)年天下の諸寺およそ五百四十五」と記載しています。

7世紀代に急増した寺は、壮大な伽藍から金堂または塔のみ、瓦を葺かない小規模な堂まで、多種多様であったと考えられます。

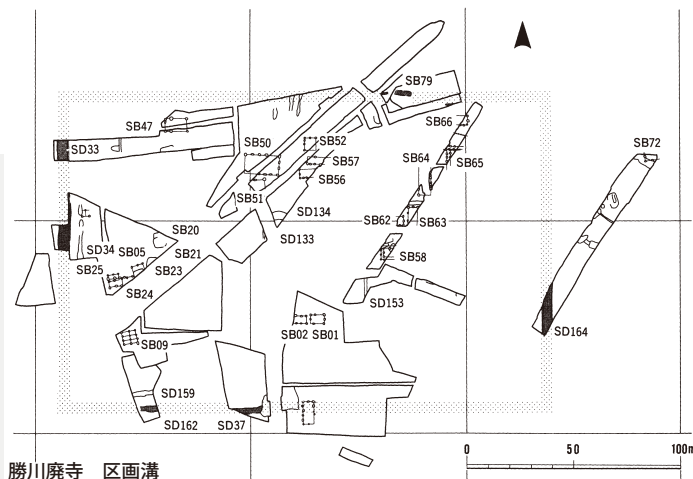
古代寺院の造営は、有力豪族の氏寺として権勢を誇示するための側面を有し、尾張地域では尾張元興寺跡(名古屋市)が最も古く、次いで勝川廃寺などがあり、かつての前方後円墳・古墳群の故地に相当し、造営主体を考える上で尾張氏・春部氏・葉栗氏・丹羽氏・海部氏の拠点と推定される点は重要です。

勝川廃寺の発掘調査と幻の大伽藍 勝川町5丁目一帯は古くから古瓦の散布が知られ、寺院または官衙の推定地とされていました。

1980～1990年にかけて、春日井市・愛知県による発掘調査が実施され、「寺」の刻書瓦のほか、区画溝により東西227m・南北148mに及ぶ壮大な寺院(勝川廃寺)の存在が明らかとなりました。塔・金堂などの伽藍配置は不明であるものの、寺域で検出した10棟以上の掘立柱建物に関連施設と推定されます。

出土した瓦は、軒丸瓦に川原寺式系の素文縁複弁八弁蓮華文・藤原宮式の珠文帯複弁八弁蓮華文、軒平瓦に三重弧文・四重弧文・扁行唐草文・均整唐草文などがあり、庄内川上流の高蔵寺瓦窯から供給されたと考えられます。

寺は、7世紀後半以降段階的に造営を開始し、存続期間は9世紀後半頃に及ぶものと推定され、識字層の存在を示す文字資料・律令祭祀に伴う祭祀具など多数の遺物が出土しています。



文字資料(刻書・墨書)



刻書埴輪



刻書瓦



墨書土器「寺」



墨書土器「太」



墨書土器「万」

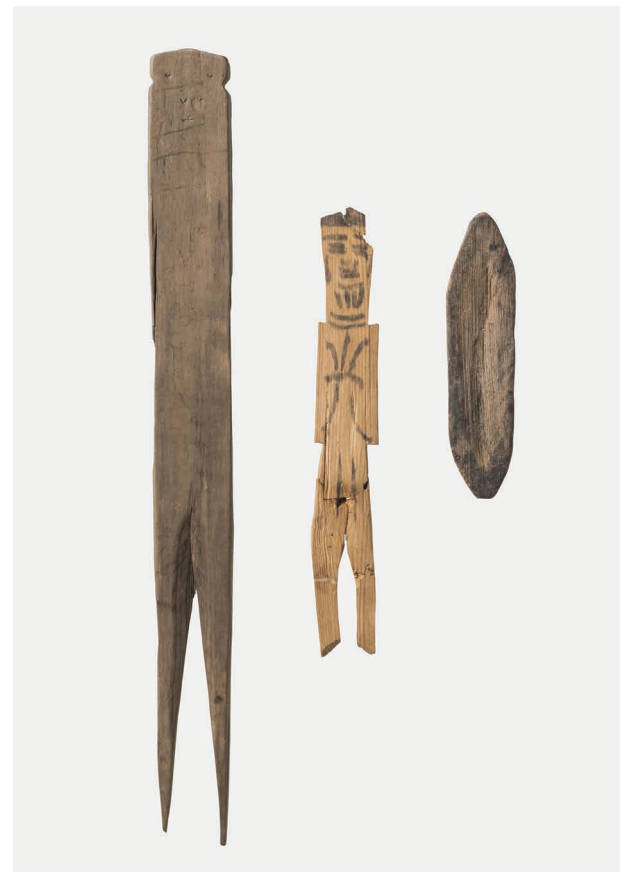
水に託した祈り(木製人形・舟形)

勝川廃寺が立地する段丘直下には旧地蔵川が流れ、出土した墨書土器・木製祭祀具から、水辺で行われた祓(ハヒ)に類する律令祭祀の場であったと推定されています。

墨書土器は、器種別では須恵器の坏・坏蓋、灰釉陶器の碗・皿のように供膳具(食器)が中心で、底部外面に墨書きしたものが多く、「万」・「太」・「徳」などの吉祥句のほか、寺を示唆する「寺」・「別院」などがあります。墨書土器の年代は8世紀から9世紀後半と推定され、勝川廃寺の存続期間を示すものとしても注目されます。

祓とは、人間の形代である「人形(ヒトガタ)」にケガレを移し、川に流すことによってケガレを取り除く儀礼で、「舟形(フナガタ)」は人のケガレを負った人形を他界へ送るための乗り物とされています。勝川遺跡から出土した人形は、8世紀代のものは未使用の荷札木簡を転用し、目・鼻・口のみの簡略な線刻で表現し、9世紀代のものは墨書により顔の各部、衣服等を表現しており、時代ごとに異なる特徴が認められます。

荷札木簡は、都へ税を運搬する際に地名・品目・数量などを記すもので、周辺に徴税を行う役所施設(春部郡衙)の存在を示唆する極めて重要な遺物といえます。なお、識字層・祭祀執行者が寺の僧侶か、あるいは郡衙の役人か、どちらとも推測の域を出ませんが、文字資料としては刻書した円筒埴輪片が出土しており、6世紀前半頃には文字が使用されていた可能性があります。



人形・舟形

宿場町 勝川の繁栄と交通要衝としての礎

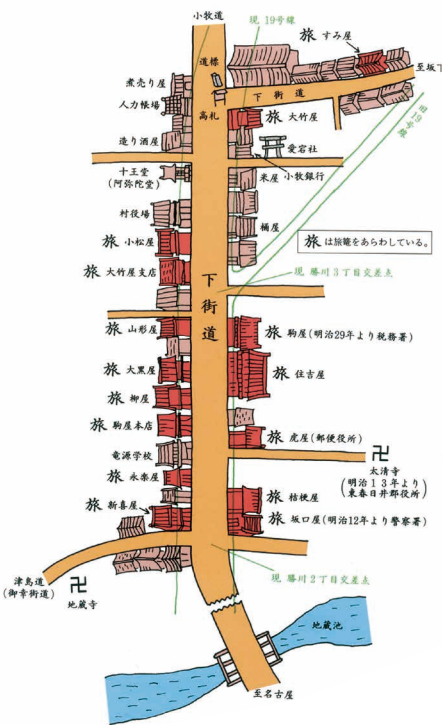
～ 町家遺構の発掘調査からみた街道筋のにぎわい ～

近世下街道と勝川 下街道は、東海道と中山道を結ぶ脇街道であり、伊勢・御嶽・善光寺への参詣人が往来する「庶民の道」として大いに賑わい、勝川は宿場町として繁栄しました。

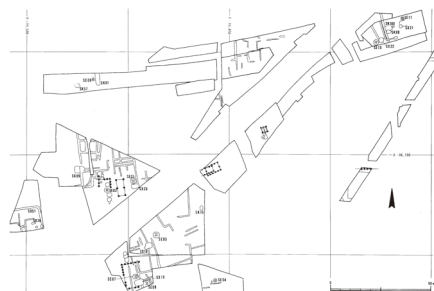
内津をはじめ下街道沿いにはヤマトタケルにまつわる伝説が残され、古墳が点在することからも、街道の起源が古くさかのぼる可能性を示唆しています。勝川は、庄内川を利用した水上交通と街道が交わる交通の要衝に位置し、弥生時代以降現代に至るまで、各時代を通じて政治・経済・交通の中心的地位を占めていたと推測されます。

近世～近代の町家 町家は、街道に接する間口に対して奥行きが長い短冊状の区割りが特徴的です。勝川遺跡では、区画溝・排水溝を整然と配置し、中庭または裏庭に井戸を設け、洗濯などを行う水場が伴う例が確認されています。

出土した陶磁器には、碗・皿などの食器、急須・徳利・播鉢・鍋などの容器・調理具のほかに、手水鉢・火鉢・灯明皿などがあり、宿場町勝川の繁栄ぶりがうかがえます。



明治のころの勝川宿



近世町家遺構配置図



廃棄土坑 陶磁器出土状況



井戸・水場



町家遺構(区画溝・井戸)

春日井市遺跡解説パンフレットその2

勝川遺跡・勝川廃寺

～環濠集落から古墳群、そして伽藍へ～



編集 春日井市教育委員会

発行 平成28(2016)年3月31日

印刷 木野瀬印刷株式会社

写真提供:公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター